

『源氏物語』における絵日記考

古 野 優 子

一

須磨・明石巻で画かれ、絵合巻で帝の前にだされた源氏の「絵日記」はその後の物語の展開を大きく変える契機となり、また、それまでの源氏のイメージを一変させるかのように一気に時の権力者へと導くものであった。作者である紫式部が絵画の造詣が深かったという興味深い指摘もされており、^①源氏物語上で「絵日記」が重要な役割を果たしている。

平安朝の文学作品にみられる「絵日記」については石原昭平氏による詳細な御論文があるが、^②氏によれば、これまで「日記絵」と「絵日記」は歴史学上、または文学において混同し使用されてきたが、その描かれている内容はそれぞれ異なるという。

「絵日記」は、自身が身の上を、私的にあるいは私的立場で、その時々的心境を「あはれ」ふかく、その思いを詩歌に

託し、描くものである。その心情は、後の人の思い出に、自画像として画くものである。これに対し、「日記絵」は日記執筆者でない他者が、日記を素材として描くものである。ここには享受者が共通に理解できる場面や心情、あるいは公的な有職の立場や目的から、客観的意識に支えられながら描かれたものである、と考えられる。

さらに「『絵日記』の意味するものは、私的な一個人の身の上の半生とか、時々的心情や感懐などを、仮名日記で執筆するという方法に近い態度で画く、ということであろう」と述べられ、絵日記と日記文学との緊密な関係を示されている。須磨・明石巻で、または絵合巻で描かれた源氏の絵は氏の説に従えば、まさに「絵日記」となるわけだが、この光源氏の絵日記について、これまで先の石原氏や伊井春樹氏^③、また、日記文学の視点から森田兼吉氏^④によって様々な問題が提起され論じられている。

ここでは、須磨・明石巻で画かれた源氏の絵日記の矛盾、紫上の絵日記の行方、源氏が紫上のみに絵日記を贈った意味について考えてみたい。

二

まず、絵合巻で勝敗を決定付けた源氏の絵はどんなものだったのだろうか。物語中で次のように述べられている。

左はなほ数ひとつある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを選びおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たふべき方なし。親王よりはじめてまつりて、涙とどめたまはず。その世に、心苦しと思ほししほどよりも、おほしけむありさま、御心に思ししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々磯の隠れなく描きあらはしたまへり。草の手に仮名の所どころに書きまぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。〔本文は、小学館 新編日本古典文学全集『源氏物語』による。〕

勝敗のつきかねた場に満を持して出された源氏の絵には須磨・

明石の風景だけでなく「草の手に仮名の所どころに書きまぜ」、「あはれなる歌どもまじれる」ものであった。風光明媚な風景の絵とその絵を解説する仮名混じりの文章と和歌が書かれ、「まほのくはしき日記」ではない、いわゆる絵日記であった。

森田兼吉氏はこの源氏の絵日記について、いくつかの問題を提起しておられるが、なかでも、

1 光源氏は絵合巻で、梅壺のために秘蔵の絵を厨子から取り出した際に初めて「このついでに」と紫の上に絵日記を見せられている。紫の上を思いその「返りごと」を聞くべきままにした絵日記なのに、明石から京にもどってより二年半もの間光源氏はなぜ彼女にこれを見せなかったのか。

2 「わが御ありさま」を「日記のやうに」かいたという紫上の作品はその後どうなったのか。

の点について考えてみたい。

では、まず1のなぜ源氏が紫上に須磨の絵日記を見せるのに年月がかかったのか、またその絵日記について考えたい。森田氏は、

絵合の場に提出された絵日記はこの巻にはじめて登場してきたときの叙述に「かたはなるまじき一帖つつ、さすがに浦々

のありさまのさやかに見えたるを選りたまふ」とあって、多くの中から場にふさわしいものが選ばれたのであった。選ばれなかった多くの絵日記がまだあって、紫の上にあてたのもその中に含まれており、「このついでに」女君に見せたのもその部分を中心であったとも読める。(中略) この光源氏の須磨・明石での書き物をまったく新しい構想のもとに再登場させたのが絵合であった。(中略) その時その折に書かれたものを選択とおそらくは編集補筆の手も加わっているだろう(以下、略)

と、述べられている。源氏が須磨の滞在中に多くの絵や文を書いていたことは物語中に幾度も語られていることだが、森田氏は多くの中からこの絵合のためにそれ相応にふさわしい絵日記が源氏によって選び取られ、また選び落とされたなかに紫上に宛てた絵日記があったことを指摘されている。

ただし、本文中には「今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける」とあり、またすぐあとに続く「ひとりゐて……」の和歌からも、紫上にとってこのときはじめて見た絵日記であったことがしれるので、氏の説に従えば須磨・明石の滞在中、紫上にあてたもので送られていなかった絵日記があったことになる。また、森田氏は須磨・明石巻と絵合巻の源氏の絵日記が異なる性格を持ち、日記についての作者の認識や態度に相違が見られる

点から「明石巻を執筆している時点では紫式部はまだ絵合の巻のような構想は持っていなかった、明石の巻から数巻を書き進めていく中で絵合の巻のような構想がなされたことを物語るものであろう」と述べ、この問題が源氏の構想の問題まで及ぶ可能性を示された。

伊井春樹氏はこの点について、

ただ、初めからそのような絵日記の作成が意図されていたのではなく、折々に描いていた絵がかなりの数となり、それらをつなぎ合わせたり、不足の部分を補ったりして日記としての体裁をとったのは後になってのことである。絵日記としてまとめられた時期は(中略)二十七歳の春、須磨へ退去して一年八、九ヶ月の時期となる。ただ彼の絵日記はそれまでの須磨・明石滞在記で終わっていたとは思われないので、さらに描き加えられるなどして第一次本から第二次本への増補成長があったであろう。

と述べられている。^⑥

また、伊井氏の指摘にもあるように、絵合のため須磨の絵日記を紫上と源氏が撰んだ時点では「一帖づつ」抜き出していた絵日記が、帝の前の絵合になると「二巻」となっており、源氏の絵日記がすくなくとも冊子本から巻本へと形態が変化していることに

気がつくのである。伊井氏はこの形態の変化について「冊子本を解体し、それを須磨とか明石などの主題別に編成し直して再び冊子本にするよりも、卷子本にするほうが簡単であろうし、それに第一卷子本であればすべてを広げて見せることができるだけに、人数の多い場合は視覚的に効果がある」と述べられ、編成のしやすさ、絵合の場においての視覚的效果のためとしている。

もともと源氏の描いた絵の中には墨絵のものもあった。

つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ、手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまさまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山のありさまを、はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。「このごろの上手にすめる干枝、常則などを召して作り絵仕うまつらせばや」と心もとながりあへり。

とあり、少なくともその墨絵に彩色の作業があったのではと思われるのである。

森田氏・伊井氏は共に絵合の場で提出された源氏の絵日記を改変や増補の手は加えてあるが須磨・明石で描かれたただ一つの絵日記のこととしてみておられる。

その一方で、古注には須磨・明石で描かれた絵日記と絵合巻で帝の前に出された絵日記とは別物とする説もある。『源氏物語聞書』の「ゑをさまく」（明石）の項には、

紫上などの方へのほせてみせ給へりとみゆ、此絵を見給は、紫上の返事も心にありぬへし、されは、返事聞へきとあり、絵合時の両巻にてはあるへからす、

とあり、『細流抄』^③にも「是は絵合に出たる絵にてはなき也」と同様の説がある。

古注が別物とする根拠は、明石巻の源氏が紫上に返事が書けるよう余白を設けたという手紙の叙述による。伊井氏はこの点について

明石巻で記されていたのは光源氏のプライベートな絵日記であり、後の絵合に用いた、いわば、晴れの作品とは別に描かれていたはずで、物語の表面には出てこないだけだとするような読みは、不可能ではないにしてもあまりにも合理的すぎる都合主義とでもいえよう。また全面的な改訂とする考えも、そのようなことがまったく書かれてもいないし、よしんば帰京後に作成し直したとしても、それではなぜ初めから卷子本にしていなかったのか、わざわざ冊子本としておくこと

などなかったはずだ、などといった疑問も生じてくる。絵日記は一つであり、それに手を加えていかなかったにしても、やはり古注で提起する絵合巻の絵日記とは別だとする解釈は、無視するわけにはいかないであろう。

とし、古注の説をまったく無視するわけにはいかないが、あくまで「絵日記は一つ」であることを述べられている。

ここで改めて考えなければならぬのは、須磨・明石で画かれた源氏の絵日記は、初めから「絵日記」になっていたのかということである。絵にどの程度文章が入れば、またはどんな内容であれば絵日記といえるのか。絵に詞書が入る程度では絵日記と呼ばれるのか。「絵日記」の定義が極めて漠然とし、本文中も詳細に語られていないため、「まほの日記にはあらず」の一文によるしかないのだが、これまでの華やかな宮廷生活から一変して蟄居の身の上となり、咎を恐れて訪れる人はほとんどなく、わびしい鬱屈とした生活の中で、唯一の慰めは絵をつれづれに描いたり、都にいる紫上をはじめとする姫君たちへ手紙を書くことだけが許されていた源氏の、自身の孤独や恋情などの感情はかってないほど高ぶったに違いない。今一度絵合巻の一文に立ち戻るなら、帝の前に提出された絵は「心の限り思い澄まして静かに画きたまへる」絵日記だったとあり、そこには須磨・明石の滞在中に「思い澄まして静かに」画くにはとうてい難しいように思えるのであ

る。

更には、この絵日記が二年八ヶ月という長い年月がかかって絵合巻に登場し、紫上にみせられたことにも注目したい。森田氏・伊井氏は「絵日記は一つ」と考えられておられるが、増補・改変するためだけにこれほど長い年月が必要なのか。また、紫上がこのときはじめて見たということにもやはり納得がいかず、改めて古注の説く「別物」の可能性があるように思えてくるのである。

また、伊井氏がもし別物であればなぜ最初から卷子本の装丁にしていなかったのかについての疑問は、いきなり帝に提出する本番用の絵日記を最初から作ることは難しいだろうから、とりあえず試作品のような前段階のものを作り、それをより精査しやすくするため、場面場面をすぐに取り出しみることができるとして仕立て上げ、更に改良を加え本番用に卷子本にしたのではないだろうか。

源氏はかつて須磨・明石で画いた絵日記を元に今度は帝の前で政治的な要素も含んだ絵合の場にふさわしい、しかもその勝負に勝つように新たに別の絵日記を仕立てた。より内容を精査し、絵や文章に工夫を凝らし形態を変え彩色なども必要としたため、その完成までかなり期間を要した。それは、当時の源氏の現状をより詳しく伝える日記となり、紫上に見せた時に何故あの時にもっと詳しく私に教えてくださらなかったのかと恨みをかけた。あくまで推測の域を出ないが、こう考えれば矛盾がすんなりと解ける

のではと思えるのである。

三

また、2は、古くから源氏古注釈書の作者達の間でも関心があった問題でもある。先に挙げた伊井氏は『源氏小鏡』に次のような一文があると指摘されている。

この絵をば我が御物からあまりに秘して、都へ持ちてのぼらせ給ひても、紫の上になにも見せたてまつらせ給はざりしが、この時の興にいだされたり。されば紫の上の恨みといふ事の一つに、この絵の事入りたり。

源氏がこの絵合巻になるまで須磨の絵日記を紫上に見せなかつたことに対して、紫上が源氏に涙ながらに訴えた「恨み」、これは古注釈書のなかで「三つの恨み」の一つに数えられている。それは『小鏡』のみならず『源氏物語提要』『光源氏一部歌』『源氏最要抄』『細流抄』『源氏綱目』『眠江入楚』など、その成立年代を考えるならば、およそ室町時代から安土桃山時代にかけての各注釈書にみえ、また、それらは地下や殿上の源氏学者の手からなっており、秘説や口伝がもてはやされたある一時期に貴賤の学派を問わず幅広く流布していたものと思われる。

しばしば古注にはこの他にも「三つの大事」など「三つの

何々」や「二つの何々」など、巻々でおこったある事柄を一つのキーワードで結び解説されることが多々ある。それは源氏梗概という性格上、梗概書を使う読者が源氏を全巻読破し精通しなくても巻々で起こった事柄やその巻の有名な和歌を覚えるために必要なものであった。また、それは口伝や秘説と同様大事にされてきた。

ただし、後に急速に梗概書から秘説などの解説が消えていくように、「三つの何々」は流動性のある内容であった。例えばこの「三つの恨み」でも『源氏物語提要』では「文のうらみ」、「絵のうらみ」、「衣のうらみ」であるが、『源氏秘義抄』では「文のうらみ」、「きぬのうらみ」、「夜るのうらみ」となり、「絵のうらみ」が「夜るのうらみ」に変わっている。

しかし、各注釈書でその内容は変化しながらも、先にあげた絵日記の矛盾点を作者たちは見逃さなかつた。例えば、『細流抄』には「只今源には今までみせ給はざるよしをうらみ給へと源にも又紫の上は絵をはかくし給ふ也」とあり、『源氏綱目』には「須磨巻にて紫上も日記のやうに絵をかき給しとあれ共、今に源へは見せ給はぬにや」、また、『眠江入楚』にも「紫上はかき給へと源へ見せ給はぬなるべし。さて物語には紫上の絵を源へ見せ給へる沙汰はなし」と多くの注釈書が源氏の須磨の絵を紫上にみせるまで時間がかかったことに加え、森田氏が2の問題としてあげた、紫上も源氏に自分が書いていた「日記のやうな」絵日記を見せて

いないことをはっきりと指摘しているのである。

この巻で源氏と紫上が交わした絵日記は三種あるものと思われる、一つは源氏が絵や和歌を書き、返事ができるよう余白をもうけた絵日記、一つは紫上がとき同じくして「日記のように」かいた絵日記、そして須磨・明石と京から二人が送り交わした、源氏が設けた余白に紫上が返事や返歌を描いている絵日記である。

無論、三つ目の、いわば完成形の二人の合作の絵日記についてはその後の紫上の日記と同様、物語中にはなにも触れられてはいないが、物語の流れから見てもここまで心を尽くした文を互いに送っていないはずはないだろう。一人の交わした絵日記は公的な、ともかく、帝などの前にだされるはずもないごくごく私的なものだったことは確かである。ある意味、二人の愛情が須磨と京で物理的にも離されたことによりこれまででない愛情のピークを迎え、それを表現したものが絵日記だったのである。それゆえ、その後の物語の表舞台にでることなく、やはり、幻巻で源氏が紫上の文殻を処分したときに焼かれてしまったのだと考えるのが自然であろう。

四

源氏は須磨・明石の蟄居中、都にいる多くの姫君たちと手紙を交わしていた。当然、紫上もその一人なのだが、紫上のみが絵を伴い、また、返事や返歌が書けるように余白が設けられた手紙を

受け取っていた。また、紫上も心が通じたかのように多くの絵を集め、「日記のやうに」した手紙を源氏に送っていた。

しかしここで疑問が残るのである。須磨・明石でつれづれな日々を送り、多くの絵を描いていた源氏が紫上だけでなくその他の姫君たちへの手紙も絵日記仕立てで送ってもよかったのである。なぜ紫上だけだったのか。

一つはこの絵日記が、源氏が明石上のもとへ通うようになってから詳しく語りだされていることに注目したい。源氏が恐れたのは明石上のことが紫上に知れ「心の隔て」ができる事であった。自ら明石上のことを書くにあたって「例よりも御文こまやかに」している。絵日記を書いて送ることは少しも相手の心を和らげ、「心の隔て」を作らないためでもあった。

更に、これまでの二人の愛情の育み方に絵が介在しているのである。周知のごとく、紫上は源氏にとって求めてやまない藤壺の形代として若紫巻で登場した。これまで出会った姫君たちと違って紫上は幼い少女であった。なかば強引に手中に収めた源氏が怯える若紫に心を打ち解かせようとしたのが「絵」であった。手習いなどで書かれる絵や書は、若菜上巻で紫上がつれづれの手習いをしているなかで自分の本意に気づく場面が書かれているように、絵が自分の感情や思いをストレートにあらわすことができるやすがでもあった。源氏は幼い紫上に絵を使って自分の思いを伝えていたのである。源氏の「ゑ」の用例は関係する語句も

合めて七三例あるが、そのうち十例が紫上と関わりをもっている。左記に挙げるならば次のようになる。¹⁰⁾

- ① 雛遊びにも、絵画いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。(若紫卷)
- ② 「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひのいとなつかしきを……(若紫卷)
- ③ 日高う大殿籠り起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつすさびるたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。(若紫卷)
- ④ なつかしううち語らひつつ、をかしき絵、遊び物ども取りに遣はして見せたまつり、御心につくことどもをしたまふ。(若紫卷)
- ⑤ 御屏風どもなど、いとおかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。(若紫卷)
- ⑥ 君へは二三日内裏へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思ほすにや、手習、絵などさまざまにかきつつ見せたまつりたまふ。(若紫卷)
- ⑦ 絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。(末摘花卷)
- ⑧ 大殿油まゐりて、絵どもなど御覧するに、出たまふべしとあ

りつれば、(中略) 姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば……(紅葉賀卷)

- ⑨ 紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。くまの物語の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧す。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。(蜩卷)

- ⑩ 宮にも、御心につきたまふべく、絵などのこと、雛の棄てがたきさま、若やかに聞こえたまへば……(若菜上卷)

また、絵が姫君たちにとってつれづれのなぐさみだけのものではなく、ときとして教育的な役割を担っていたことは⑥や明石の姫君の入内の際、源氏や紫の上が細心の注意を払って絵をとりどり集めていたことから明らかである。

⑨では明石の姫君の入内の際に集めた絵を見て幼少の自分を思い出している。幼かった自分と源氏が絵を書きながらお互いの思いを交し合った日々。源氏と紫上の愛情が絵によっても育まれていたのである。また、絵を描くことによって文章や和歌で書き尽すことのできないわが身の思いや紫上に対する恋情を訴えていたのではないだろうか。

加えて、蟄居中に届いた紫上の手紙に注目したい。度々届く紫上の手紙は常に源氏の心を打つものであった。更に、外に出るの

が困難なほどのひどい暴風雨に見舞われ、源氏がこの世の終わりかとしみじみわが身の境遇を思っていたところ唯一、京の紫上から手紙が届くのである。その内容は「あはれに悲しきことども」が書かれており、源氏は一層、涙にくれるのだった。このときの手紙は源氏にとって格別な手紙だったようで、のちに「一条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きおし拭ひつつ聞こえたまふ」とあり、その返事がなかなか書けないほどのものであった。

源氏が紫上の方に絵日記を送ったのは、

一、明石の姫君のことを紫上にあかしたことにより、「心の隔て」ができることがないように、紫上の心をやわらげるためのものであった。

二、二人が長年それぞれの思いを「絵」に託しながら愛情を育んできたことや紫上に宛てた手紙の和歌や文章に加え、紫上の幼少の頃の日々を思い出すかのように自分の思いが込められた絵を書いたのは、文章のみの文より、より心情に切迫した、書きつくすことの出来ない現在の自分の思いや紫上に対する愛情を表現するためだった。

三、源氏のつらい境遇に他の姫君たちよりいっそう心を尽くした源氏を思いやる手紙を紫上が送ってきたことにもよる。

源氏が蟄居中、紫上の方に絵日記を贈ったことは、紫上が源氏のもっとも理想の女性であり、源氏に愛された女性であることを裏付ける一つの証になるものと思われる。

五

以上、「源氏物語」にでてくる「絵日記」について考察を試みた。明石・須磨巻・絵合巻での光源氏の絵日記の矛盾、紫上に見せるまで長い年月がかかり、また、それを紫上がはじめてみたということについて須磨・明石巻で画かれた源氏の絵日記と絵合巻の絵日記では別物の絵日記である可能性を述べ、また時間じくして画かれた紫上の絵日記は、あくまで源氏と交わしたごくごくプライベートな日記であり、だからこそ今後の表舞台に出ることなく幻巻で源氏の手によって焼かれたと考えた。

また、絵日記を紫上にだけ贈ったのは明石上の出現によって「心の隔て」を作ることのないよう、より心情を知ってもらうための配慮であり、また、幼い頃から互いが「絵」によって愛情を育み思いを交し合っていたため、あえて「絵日記」を贈ったのではないだろうかと考えてみた。

更に今後、絵日記と源氏・紫上との関係、絵日記や絵物語がどう文学作品にかかわっているか詳しく調査したいと思っている。

注

- (1) 川名淳子氏『紫式部日記』における絵画性』『女流日記文学講座 第三巻』(平成三年七月 勉誠社)
- (2) 石原昭平氏『平安日記文学の研究』(平成九年二月 勉誠社)
- (3) 伊井春樹氏『中古文学 第三十九号』
- (4) 森田兼吉氏『日記文学論叢』(平成十八年十一月 笠間書院)
- (5) 注4に同じ
- (6) 注3に同じ
- (7) 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成八 弄花抄 付源氏物語聞書』(昭和五十八年四月 桜楓社)
- (8) 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成七 細流抄 内閣文庫本』(昭和五十五年十一月 桜楓社)
- (9) 注8に同じ
- (10) 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成一〇 源氏綱目 付源氏絵詞』(昭和五十九年 桜楓社)
- (11) 中田武司編『源氏物語古注集成一二 眠江入楚 中院通勝著』(昭和五十五年二月、昭和五十九年五月 桜楓社)
- (12) 上田英代氏他編『源氏物語語彙用例総索引 自立語編』(平成四年十二月 勉誠社)

〔付記〕

本稿は、森田兼吉先生の御著書『日記文学論叢』に収録されている第I章十節の「光源氏はなぜ絵日記を書いたか―須磨・明石から絵合へ―」の御論文に触発されて考察を試みたものである。

先生は平成十六年七月二十五日に御逝去された。あまりにも突然のお

別れにただただ呆然とし、いまも信じられずにいるのである。他大学から梅光へときた私をいつも優しく御指導して頂いた。在学中に先生から頂いた文学に対する情熱と多くの課題を今後少しずつでも私なりに研究にかかしていきたいと思っている。

森田兼吉先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。